

享保期の村請制と免割について

— 播磨国飾西郡杉之内村の免割帳を中心として —

竹本 敬市

要旨

播磨国飾西郡杉之内村の「免割帳」を中心とする史料をもとに、享保期の村請制の実態を解明しようとした。村請制は幕藩体制の根幹をなす制度で、村で税を請け負って納めるという特異な制度である。この村請制の特質を整理した。その結果、村請制を取り入れることによって本百姓の維持政策が当然の成り行きとして必要になってくること。年貢未納者の不足分を補う責任のある庄屋のもとに必然的に土地が集積されていく仕組みであること。庄屋と百姓との格差や事務的煩雑さなどから帳面開示を求める村方騒動に発展する危険をはらんでいること。貨幣経済の浸透は村請制にとって危機的な状況となる問題点をもっていること。村の中では相互扶助が組織化されていくこと。さらに、封建的な社会の中で民主的な免割作業をすることによって村落自治を成長・発展させる要素があったこと等がわかった。村請制と村方騒動・百姓一揆などの関係について、特に幕藩体制の変質、崩壊過程の中での村請制についての問題や、村落自治の発展と村請制の関係などについて、今後の課題が残った。

キーワード：年貢、村請制、免割帳、杉之内村

はじめに

本稿では、享保期の村請制の実態解明とその特質にせまりたい。村請制は幕藩体制の根幹をなす仕組みである。税の賦課と徴収が村に課されるという特異な形態をとる。村が税を請け負うという制度が、その制度を取ることによってどのような特徴が生まれてくるのか、また、その変化がどのようにあらわれ、幕藩体制の変質の特徴となつてあらわれるのかをさぐりたい。

村請制は、幕藩体制の構造的な特質にかかる内容で、基礎構造や幕藩制解体の論理解明に大きくかわる内容である。これまで、近世地域史研究の研究史上からもいろいろな論点から研究がすすめられた。例えば、農民層の分解の進行や世直し状況、維新変革に向かう支配機構の動きを、幕藩制を構成する重要な要素である兵農分離・石高制・村請制・鎖国制などの幕藩制の構造論から試みられたり、幕藩制国家論の視点から、村請制は弱体化した経済外強制を補強するためにとられた人民支配機構ととらえて村落の自律性に注目したり、地域の自主的な運営や民衆による地域形成の分析などを試みた地域運営論、また、国家権力と民衆の動向との関係を検討する社会的権力論、地域社会の主導的な役割を果たす主体を検出する中で変革要因や変革主体を論じる地域社会構造論、将又、地域の連帯と合意にもとづく公共性などの問題も追及された¹⁾。研究の過程では、村役人層に注目したり、地域リーダー、中間層、半プロ層などいろいろな階層に注目が集まった。

ここでは、こういう研究動向にみる視点にも配慮しながら、村請制の地域における現実的な姿を明らかにし、特質から村の自治のあり方を検証していきたい。

史料としては、播磨国飾西郡杉之内村の庄屋を勤めていた「清瀬一郎氏文書」(以下「清瀬

家文書」とする)を使用する。「清瀬家文書」の「免割帳」「小前帳」などを中心にして論及したい。「免割帳」は村に賦課された年貢を村人一人一人の持高に応じて割り当てを記した帳面である。各人のその年の年貢の負担状況がわかる。また、「小前帳」は、各人に賦課された年貢の収納状況を記録したものである。年貢の収納結果がわかる。こうした史料をもとにして、まず村請制と課徴税制度の実態解明からはじめたい。

一 村請制の実態

(一) 杉之内村について

杉之内村は姫路域より北へ三里のところに位置し、夢前川の中流域にある。中世には新熊野社領の賀屋荘があったといわれるところで、近世に入ってから姫路藩領となっていた。姫路藩は、表①の通り、池田・本多・奥平・松平と幕府と関係の強い大名が領していた。元文式(一七三七)年巳六月の「飾西郡嘉屋庄杉之内村明細帳」²⁾から村の状況を簡単にみる。

(前略)

本田畑新田畑合式拾貳町壹反壹畝拾六歩

本田新田高合三百三拾壹石八斗三合

小物成

一 米壹斗六升四合

大米

表1 姫路藩主の変遷

入部年月日	藩主	知行高 (万石)
慶長5 (1600) .10.15.	池田 輝政・利隆・光政	52→42
元和3 (1617) . 7.14.	本多 (一次) 忠政・政朝・正勝	15
寛永16 (1639) . 3. 3.	奥平 忠明・忠弘	18→15
慶安元 (1648) . 6.14.	松平 (一次) 直基	15
慶安2 (1649) . 6. 9.	榊原 (一次) 忠次・政房・政倫	15
寛文7 (1667) . 6.19.	松平 (二次) 直矩	15
天和2 (1682) . 2.12.	本多 (二次) 忠国・忠孝	15
宝永元 (1704) . 5.28.	榊原 (二次) 政邦・政祐・政岑・政永	15
寛保2 (1742) . 6.10.	松平 (三次) 明矩	15
寛延2 (1749) . 1.15.	酒井 忠恭・忠以・忠道・忠実・忠学・ 忠宝・忠顯・忠積・忠淳・忠邦	15

一 御敷新聞壹畝廿九步五分 高百石二付五升宛
 (中略) 七ヶ所持主六人
 一 米貳斗 蓮花寺屋敷御年貢米十石米六持合来り候
 一 米七升 郷蔵屋敷御年貢米
 一 米六斗五升七合 本高二式里米庄屋へ
 一 米壹石壹斗 古米々定法右扶持合
 一 米貳升 古米々定法組頭江持合
 一 米壹斗四升 氏宮御供米
 一 米壹石 役足給

一 米壹石貳斗七合 所谷口池敷高貳石三升貳合也御年貢二付
 同池水掛り高林谷口池水懸り
 一 米ノ四石五斗七升四合 草藁銀
 一 銀百六拾六匁三分貳りん 定役山役銀
 一 銀三拾七匁七分八厘 同山伐札役銀
 一 銀貳拾六匁 札六枚半 同果役銀
 一 銀壹匁貳分壹厘 同柿渋役銀
 一 銀三匁七分五厘 諸人用卷反八分七厘
 一 銀貳百三拾五匁分六厘 合貳百三拾六匁分
 一 銀七分壹厘 國銀包賃
 一 銀五匁貳分貳厘 御蔵庭藁代
 一 銀五匁九分三厘 (中略)
 一 家数五拾二軒 内
 三拾六軒 本百姓 九石以下貳拾五人、貳拾九石迄拾人、三拾石以上 壹人
 拾七軒 水呑 内 屋敷高斗之者拾壹人少々下作仕、冬春ハ木柴売申賣新屋敷
 二住ニ而仕姫路へ売ニ參、又山之内村奥谷參小木柴仕姫
 路へ売ニ參申候、同借り屋敷也、
 なし
 三人、春秋所ニ而日用仕、冬春ハ薪売姫路へ參申候
 (中略)
 一 竈数五拾二軒
 一 人数貳百五拾四人 内 男百三拾六人 女百八人
 貳人 出家
 三人 尼
 (内訳の人数は貼り紙に記載された人数)
 一 男女之働 男作方間二木柴売、但、同組新庄村二売ニ參申候、麦作間ハ山之内

村川東谷へ参新仕姫路へ売二参申候、
女、作物内二而こなしノ間二布木綿仕候、

一馬 壹疋
一牛 拾八疋

(後略)

本田畑の等級別石高をみると上田が六七石八一七、中田が一四九石九二九、下田が六六石四二九、上畑が三三石四〇七、中畑が一石〇五三、下畑が八石五五九、下々畑が〇石九八九で、その他に新田畑があり、田方中心の村であることがわかる。生産基準となる石盛は、上田が二石、中田が一石八斗、下田が一石六斗、上畑が一石、中畑が八斗、下畑が六斗、下々畑が三斗で、田方の石盛が高いのは村内の半分のところ、二毛作が行われていたためと考えられる。家数五三軒、内、本百姓三六軒、水呑一七軒。人数は三五四人である。

(二) 村落構造

杉之内村はもと古知之庄村の一部であった。宝永六(一七〇九)年古知之庄村から分村して成立する。それより前の元禄十六(一七〇三)年末ノ九月の前之庄組古知ノ庄村内杉之内村の「御検見帳」によると三三二石七〇九、正徳三(一七二二)歳巳四月十八日の「田畑名寄帳」で三三八石六五〇五(新田畑は含まれていない)である。元文二(一七三七)年に三三三石八〇三、天保の「播磨国郷帳」で三四〇石九六七である。村高は新しい田畑の開発された分が増えている程度である。ごく一般的な村である。

元文二年の「明細帳」に農民層が四つの階層に分けて記載されている例があるので、それにならって論を進めていく。元文二年の「明細帳」には、持高が三十石以上の者は一軒。十石から三十石までが一〇軒。十石未満が二五軒である。ほとんどの者が農業に従事していたと考えられる。そして、水呑が一七軒である。ここでの水呑は二石未満のものを指しているようで、その内一人が「屋敷高斗者」で屋敷或は田畑を少々持っているものを指している。その生活は「下作」(「小作」)し「冬春ハ木柴売」りをしているか、村から一里北にある山之内村へ行つて「木柴仕姫路へ売二参申候」とある。「借り屋敷之者」は六人である。彼らは、春秋は所によって日雇いをし、冬春は薪を姫路へ持っていつて売っているということである。姫路へ行つて奉公している人も二〇人いる。

持高三〇石以上が一軒ある。それは杉之内村の庄屋である八郎右衛門である。持高は三七石余である。八郎右衛門は家内労働力でまかなえるところは自作しそれ以外の耕地は小作人に貸す地主であった。

この明細帳で本百姓と水呑とを区分し、更に本百姓については九石、二九石を界に区分しているのは農事による再生産の可能な範囲を意識しているように思える。九石以下の本百姓は再生産の主たる手段を農事に置きながらも自分の持高だけでは賄いきれないところがあり、小作や奉公、手間稼ぎなどにより不足分を補う必要のある階層である。それ以上の階層は農事によって再生産が十分に可能である。こうした階層構成をもとにしながら他の年の階層分布をみる。

表2 杉之内村の持高の階層分布

年代	2石未満	2石〜3石	3石〜4石	4石〜5石	5石〜6石	6石〜7石	7石〜8石	8石〜9石	9石〜10石	10石〜15石	15石〜20石	20石以上	不明	家数	
貞享3年	16	11	12	4	13	9	7	8	5	25	10	4		124	古知之庄村全体で
元禄16年	10	5	2	4	2	1	1	2	3	6	7	3		46	
正徳3年	13	9	3	1	2	2	0	3	0	8	4	2		47	
享保17年	15	7	5	3	2	3	1	3	3	6	1	3	1	53	
享保18年	15	8	5	2	3	3	2	2	2	6	1	3		52	
享保19年	14	6	6	3	4	3	2	2	1	8	1	2		52	
享保20年	13	7	8	3	4	1	3	2	1	7	2	2		53	
元文元年	15	6	6	1	5	3	1	2	2	7	2	2		52	
元文3年	15	6	8	1	6	0	2	2	2	7	2	2		53	
元文4年	15	7	4	4	5	0	3	2	3	7	1	2		53	
元文5年	15	7	5	3	5	1	2	4	1	7	1	2		53	
寛保元年	15	7	4	4	6	1	3	4	0	6	1	2		53	
寛保2年	13	7	6	1	9	2	3	2	2	5	0	3		53	
寛保3年	14	4	6	2	8	2	3	3	1	5	0	3		51	
延享元年	14	2	7	1	9	3	2	3	1	5	1	2		50	
延享2年	14	1	8	3	11	2	4	2	1	5	0	2		53	
延享3年	16	1	7	2	9	1	7	1	1	5	0	2		52	
宝暦3年	16	12	5	5	5	3	3	2	2	2	0	1		56	
宝暦5年	21	9	6	5	3	4	4	3	0	3	0	2		60	
宝暦7年	23	9	5	5	4	2	4	3	0	3	0	2		60	
宝暦8年	17	14	6	3	4	2	4	3	0	4	0	1		58	
宝暦11年	11	16	5	3	3	2	6	3	0	4	0	1	1	55	
宝暦12年	11	14	6	3	4	2	6	3	0	4	0	1	1	55	
宝暦13年	11	12	6	5	4	2	7	2	1	3	0	1	1	55	
明和3年	11	10	6	8	1	3	5	4	1	3	0	1		53	
天明8年	8	7	7	10	3	6	3	1	3	3	0	1		52	

「免割帳」や「宗門人別改帳」「名寄帳」などの帳面に記載されてある持高を集計して階層分布状況を見ると次の表2ようになる。

水呑層は貞享三年一六名で全体の二二・九%であったものが、元禄十六年には二二・七%、正

徳三年には二七・六%、享保十七年には二八・三%と増加傾向にある。九石以上層は貞享三年で全体の三五・四%であったものが、元禄十六年には四一・三%、正徳三年には二九・七%、享保十七年には二四・五%と元禄期までは増加傾向にあるがその後は減少傾向にある。

三〇石以上の持高を持つ庄屋八郎右衛門の持高変遷をみる。表3の通りである。八郎右衛門は、古知ノ庄村内から分かれて杉之内村になると庄屋になっている。その後土地集積を急速に進めている。以前は十数石で村内の中堅クラス的位置にいたが、享保一十七年には村内最大の高持百姓に発展している。庄屋八郎右衛門の土地集積には村請制との関係が深い。この点については後述する。

表3 八郎右衛門の持高変換

年代	持高 (石)
元禄16 (1703) 年	17.722
正徳3 (1713) 年	19.1353
享保17 (1732) 年	25.497
享保18 (1733) 年	33.452
享保19 (1734) 年	33.489
享保20 (1735) 年	33.545
元文元 (1736) 年	37.626
元文3 (1738) 年	40.473
元文4 (1739) 年	41.586
元文5 (1740) 年	45.845
寛保元 (1741) 年	51.099
寛保2 (1742) 年	51.696
寛保3 (1743) 年	51.696
延享元 (1744) 年	54.436
延享元 (1744) 年	55.305
延享元 (1744) 年	63.098
宝暦3 (1753) 年	94.746

(三) 村請制の実態

幕藩体制下の課税制度は、検地によって定められた石高が基準となっていた。村の石高を基準にその年の生産状況によって年々村に年貢が賦課される方式である。したがって、石高制と村請制は密接な関係にあった。領主は個別の百姓に対してではなく村に年貢を賦課する。村は領主から賦課された年貢を村全体で請け負う仕組みである。年貢を村全体で請け負うので村請制という。村が年貢の皆済について連帯責任を持つということである。村に賦課された年貢を、村内で百姓一人一人の持高に応じて割り当てる。これが免割である。割り当てられた分を百姓は期日までに納める制度である。割り当てられた分が納められないと、村で請け負う連帯責任制度になっているために誰かがその不足分を補わなければならないということである。そのとき、村役人である庄屋や組頭の責任が重くなる。

村請制の初期段階では、名目的には村請ではあるが実質的には村役人の代表である庄屋が請け負っていたといわれる。「庄屋請」ということである。領主から村に請求された年貢を庄屋が全責任を持って請け負っていたというものである。中世の百姓請、庄屋請の流れの中で

「村役人が年貢納入責任者として個人的に請け負うかたちで村内の年貢の小割・算用を裁量した」とし、近世後期以降に村全体で請け負い、小割を合議して集团的に村で請け負うかたちに変化するといふ人もいる。

元和年間の「免状」には、最後の部分に「右無甲乙代官之前二而小百姓等迄寄合致割符十月中二皆済可仕者也」とある。また、その他の「免状」にも「右之通村中相談之上、前之通割符仕少茂相違無之申分無御座候、為後日連印仍而如件」というようにある。領主側は、庄屋・百姓・出作の者まで残らず立ち会って免割するように指示している。そして、年貢を受ける村の側でも「免割目録」の最後の部分に「右ハ当申ノ御年貢米其外諸役諸色村之入用とも村中小作之者迄出合寄人立吟味仕、相談之上無高下致割符算用相済判形仕候上ハ向後何之申分も無御座候、若此上出入ケ間敷義於申出ハ何之曲事ニも可被仰付候、少も御非道と奉存間敷候、為後日大庄屋小庄屋子頭惣百姓中連判目指上申所仍而如件」と、村中小作の者まで出合って相談の上割付するといっている。割付を村中の合議で集团的にするといっている。庄屋の個人的な請負ではなく村で集团的に請け負うことをいっている。

年貢の村請については、五人組の前書きにもある。飾西郡青山村の文化五年辰三月の「御仕置五人組帳」には、村請制に関する内容として次のような項目がある。

一 耕作之儀不情ニ致者あらハ、急度令訟儀異見を加ヘ可申候、若不用候ハバ、可訴出候、なをさリニ差置其者之年貢未進等於有之者、名主・年寄・五人組可為弁納事、

(中略)

一 御年貢皆済以前米穀他所江一切不可出候、且又、御年貢米金銀名主取立候節、耆人別ニ納之、米金銀員数月日共帳面ニ記し、納主之判形取置、請取手形ニハ名主令印形帳面ニ押切致し、納之度々相渡可申候、若、名主納人共ニ右之段不埒ニ致置後日ニ及出入候とも取上無之候、勿論、毎年御年貢割付皆済目録出候ハバ、村中出作之者迄不殘寄合拜見致し、其段名主方江印形可取置候、兼而御年貢割之儀、甲乙無之様微細ニ未々之小百姓迄聊不疑様ニ可仕候、且又、御年貢割と村方夫錢小入用与混乱不致候様、可割合、勿論、御年貢米金銀納方之儀者、百姓第一之勤ニ候条、常々心掛置、納之日限申渡候通、急度可相納候処、畢竟、平日之心掛ケ疎ニ而納仕触有之節ニ至り致才覚候故差支候事共出来納方おのつから不埒成事ニ候、依之、納方延引之儀ニ付彼是申立等致候とも決而不可取用候、尤、御代官所江金銀等納候節、一村限り罷出候而ハ難用等相懸り、村方難儀之事ニ候間、近村々申合持參可相納事、

年貢の割付は、村中出作の者まで残らず寄り合って甲乙がないように、また、皆が疑ったりするようないいようにいっている。村請制では領主側が村の自治を促がしている。村請制では村の自治の道筋を領主側が開いているという点で村請制を高く評価できる。村請制と村落の自治の問題については後述する。そして、未進の場合は村役人が弁納するようにいっている。村の連帯責任であるが、最終的には村役人に責任があるということである。

村請制の下請けとして「組請」があつた事実もある。これは近世後期の事例であるが、年貢を未納した場合の申合せがある。文化七年三月に年貢を未進した場合、四ヶ条からなる「申合」をしている。その中の一条に次のような文言がある。

一 御年貢米銀不足之分者、其年切二組中江引受借替、御未進二不相成様可致候事、但、御年貢作負、当人家財二而引足不申節ハ、其組中高割二可致事、

年貢未進の場合、家財道具を売つてでも年貢を出すようにすると申合せたものである。それでも足りない場合は、その年切で「組」すなわち五人組で引受けて高割で出すというものである。五人組の仲間が持高に応じて高割で出すというものである。その際は「借替」なので、未進者と立て替えて出した者との間には貸借関係すなわち「借替」が成立するというのである。これは当然である。ところで、この史料の示している内容はまさに村請制の下請け組織として五人組による「組請」の存在を意味する。

「組請」になると組頭を中心とする五人組の仲間内に責任ののしかかってくる。

村請制は、責任体制が明確で、村が請け負うから村に責任がある。「組請」になると組頭とその仲間内に責任がある。村役人である庄屋、そして五人組の頭である組頭を中心とするところにその責任がある仕組みである。最終的には村役人の長である庄屋ということになる。また、村の支配についても村役人に負うところが大きい。村落支配、地域運営に村請制との関連深さが出て来るのは当然である。

この村請制は、年貢を徴収する領主側にとって非常に都合のよい仕組みである。年貢の請求額に問題がなければ後は黙つていても年貢が入ってくる仕組みである。そのためか、年貢の請求書にあたる「年貢免状」の文面が、幕藩体制の初期は短い。年月日、人名を含めて八行ほどで終わっているものもある。しかし、中期から後期になると長くなる。請求額の根拠を明確にするためなのか後半になるにしたがつて文面が長くなる傾向にある。根拠を明確にするための理由づけとして長文となったと考えることができる。

(四) 村請制の特質

村請制が実施されている結果として、割り当られた部分が納められなかった場合、前述した「組請」で示したように個人的には家財道具を売つてでも年貢を出さなければならない。それでも無理な場合は、村で請け負っている関係上、村の誰かが補わなければならない。その場合、最終的な責任は庄屋のところにある。庄屋請の状態であれば当然責任は庄屋ということになる。村請Ⅱ集団請の場合においては庄屋、組頭、組内のものということになる。未納分を立て替えるのは年貢を集める責任のある庄屋である場合が多くなる。そうすると、必然的に立て替えた庄屋と未納者の間に貸借関係が成立する。耕作地を抵当とした質取関係となる場合が多い。未納した分は返済ができないことが多く、質入れた耕作地は質流れとなることが多い。結果的に耕作地が未納分を立て替えたものに移動することになる。こうして、必然的に耕作地が、年貢の未納分を立て替える庄屋のものとなってくるのである。村請制の一つの特質として、

村請制をとっていることが村役人である庄屋のもとに土地が集積されていくようになるということである。そこでは、庄屋の条件として、未納分を立て替えることができるだけの経済力と村の者からの信用を持ち合わせていなければならないということである。八郎右衛門の土地集積が急速に進んでいったのもそうした事情によるものと考えられる。

二 免割帳と小前帳

(一) 「免割帳」について

杉之内村には「免割帳」が多く残っている。享保十七（一七三二）年から宝暦五（一七五五）年までである。帳面の正式な表題は「御免割帳」とある。記載形式は、初めに村に課税される内訳が記載され、その後村の各人に割り当てられた分の記載がある。享保十七年の「御免割帳」の最初の部分と途中からの個別の部分、さらに最後の部分は次のようになっている。

(表紙)

享保十七年

御免割帳 前之庄組 杉之内村

子ノ十一月十五日

杉之内村

一 高式百貳拾石五斗壹升壹合

内三斗四升三合 砂入一作引

残而貳百貳拾石壹斗六升八合

取百貳拾壹石九升貳合 免五ツ五分

七石貳斗六升六合 右之夫米

貳石四斗貳升貳合 同口米

壹斗壹升 犬米

メ百三拾石八斗九升

一 七拾七石四升壹合 分地

内三斗七升三合 申ノ川欠高

壹石五斗壹升四合 一作引

残而七拾五石壹斗五升四合

取三拾七石五斗七升七合 免五ツ取

貳石貳斗五升五合 右之夫米

七斗五升壹合 同口米

三升九合 犬米

メ四拾石六斗貳升貳合

- 一 二口ノ百七拾壹石五斗壹升貳合
- 一 貳斗六升 大庄屋主役米
- 一 貳斗六升 同手代給米
- 一 六斗五升七合 高二式厘庄屋渡ス
- 一 貳斗 蓮花寺屋敷年貢
- 一 壹斗四升 氏宮御供米
- 一 七升 郷藏屋敷年貢
- 一 貳斗 庄屋町宿賃
- 一 壹石壹斗 同扶持方合力
- 一 壹石壹斗 丑阿るき給
- 一 四斗 生野や屋敷
- 一 六升 論見石持合
- 一 五升 丑ノありき両人江渡

(中略)

弥物石衛門

- 一 高拾三石六斗四升壹合
- 一 取八石四升八合 割免五ツ九分
- 一 高六斗六升七合 上ヶ地高
- 一 内式斗七升七合 砂入一作引
- 一 残而三斗九升
- 一 取壹斗九升壹合 割免四ツ九分
- 一 新田高六升六合
- 一 取貳升貳合 割免三ツ三分五厘
- 一 はひと三升五合
- 一 種かり四斗壹升六合
- 一 物成ノ八石七斗壹升貳合

吉石衛門

- 一 高三石五斗五升九合
- 一 取貳石壹斗 割免五ツ九分
- 一 高貳石四斗六升 上ヶ地高
- 一 取壹石貳斗五合 割免四ツ九分
- 一 上地入あけ四升
- 一 はひと三升五合
- 一 種かり壹斗九升五合

物成ノ壹石九斗六升七合

久右衛門

(中略)

源右衛門

- 一 高三石八斗九升
- 一 取貳石貳斗九升五合 割免五ツ九分
- 一 同高六斗壹升貳合 上ヶ地
- 一 取三斗 割免四ツ九分
- 一 種本り九升壹合
- 一 はいと三升五合
- 一 物成ノ貳石七斗貳升壹合

- 一 取ノ百七拾四石貳斗四升
- 一 上ヶ地取ノ拾五石五升五合
- 一 同田地入上ヶメ壹斗壹升
- 一 新田取ノ壹石四斗七升七合
- 一 村物成三口ノ五斗四升八合
- 一 はいとメ壹石六斗四升五合
- 一 種本利ノ八石四斗五升
- 一 物而物成合式百壹石五斗貳升五合

右之通、村中相談之上前之通割符仕少茂相違無之申分無御座候、為後日連判仍而如件

前庄組杉之内村惣百姓

享保十七年十一月十五日

弥物石衛門

三郎兵衛

平九郎

吉太夫

(以下省略)

杉之内村の「免割帳」はこのようになっていたが、村によつては、割り当てられた年貢の収納状況を合せて記録されているものもある。こうした帳面の作成は、領主から年貢の請求書にあたる「年貢免状」が出されてすぐに庄屋の手によつて作成される。庄屋には帳面作成に必要な能力が求められる。文面では「村中相談之上」となっているが、庄屋が「年貢免状」をもとに原案を作成し提示されたものを了承し連印したものである。惣百姓が納得できるよう

な免割をしなければならない。通常の村高分、分地の分、それに新田の分をそれぞれで割合を決めて免割をしなければならないわけである。杉之内村の場合、通常の村高については「割免五ツ九分」で、上ヶ地高については「割免四ツ九分」、新田高については「割免三ツ三分五厘」である。その他に「はひと」(配当)、「種かり」(種借り)の配分もある。これ等を村の各人が納得いくように割り振りしているのである。村民への配慮のほどがしのばれる。こうしたところに村請制のもう一つの特質がみとれる。すなわち、年貢徴収にみる村政の民主的な側面である。村請制をとるからには、惣百姓が納得するような民主的な面がなければならないということである。庄屋を中心とする村の自治機能である。村の政治は庄屋を中心として組頭・本百姓・水呑という集権的な上意不達の側面を持ちながらも、村請制では民主的な村民尊重の面もあったということである。

それにしても、庄屋はこうした煩雑な仕事を短い日数のなかでしなければならなかった。さらに、年貢の収納記録も取らなければならなかった。帳面の月日からしてもすでに収穫が始まり税の納付も随時進行している時日である。事務的煩雑さから年貢の徴収状況・収支についての帳簿の整理状況についての監査請求にあたる村方騒動に発展する危険をはらんでいるということもいえる。近世中後期・幕末期の村方騒動の事例がそれを示している。

ところで、年貢は米納だけではなかったはずである。同じころの元文元(一七三三)年十一月十三日の「辰之銀割算用帳」がある。「銀算用」として「百六拾九匁式分壹厘」の負担があり、その内「三拾三匁七分八厘」は九月十一日に上納して残りの百三拾四匁四分三厘とその他村人用銀一五六匁四分八厘や井せき渡し日用五拾目など四五八匁余の銀割りをしている。また、元文二(一七三六)年巳之三月の「前之庄組杉之内村辰之御年貢米井万雜小前帳 ほかへ」がある。それには米納分の他に「諸色銀」として、「草藁銀、入目包賃、山銭札役銀、柿栗役銀、山役銀、組割銀、御蔵葎代、井せき渡し日用銀」などがある。総額八一六匁一厘とになっている。その内、札役とか柿栗役銀、山役銀、御蔵新開などの費用の一〇七匁四分六厘はそれぞれの役持、株持、札持の人が負担するとなっていて¹⁰⁾、残りの七〇八匁五分五厘を「役高拾石三付式拾三匁九分宛」とするとある¹¹⁾。

村請制のもとでは、銀納について、負担する部分は明確である。札役とか柿栗役銀、山役銀、御蔵新開などの役を持っている人が負担するとか残りの負担について高割にすることなどははっきりとしている。しかし、村の人たちがどのような方法で貨幣を入手しているかについては把握しづらいところがある。村請制では負担する分については明確であるが貨幣の収入については明確に把握できていないという側面があるということである。貨幣経済の浸透が村請制にとって把握できない面を形成していくということである。従って、村請制は石高制のもとでは機能するが貨幣経済の社会では難しいところがあるということを示している。

(二)「小前帳」について

杉之内村には、「免割帳」と合わせて「小前帳」が残されている。杉之内村の「小前帳」の正式名称は「御蔵貢米小前連控帳」である。記載内容は、各人の年貢の収納状況を記録したものである。例えば、享保十七年子之八月の「御蔵貢米小前連控帳」前之庄組杉之内村によると、

初めは次のようにある。

御物成八石七斗壹升式合	弥三右衛門
内納方	
八月十四日	
一 八斗	上三方御蔵納
同十六日	
一 四斗	舟場御蔵納
同十九日	
一 八斗	同御蔵納
十月十一日	
一 八斗	上三方御蔵納
同十二日	
一 八斗	舟場御蔵納
同廿三日	
一 四斗 餅	下三方御蔵納
十一月二日	
一 九斗三升	御用米御蔵納
一 壹石八斗五升	下作米 仁兵衛入
一 壹石壹斗八升	下作米 四郎兵衛入
十一月十三日	
一 式斗	初代米 舟借御蔵納
一 壹斗壹升五合	米代 寺入
一 四斗三升	御拝借米入
一 壹石式斗	惣借手配入 利三割
一 四升	種米本ふけ田之分合方 八郎右衛門入
一 式斗八升	丑之御種賃
納メ拾石式斗式升五合	
内	
壹石壹斗壹升三合	亥未進惣借シ本利二渡ス
四斗	頼母子米 庄右衛門渡
引メテ八石七斗壹升式合	御物成

これは、弥三右衛門の年貢の収納状況を示している。年貢を納める御蔵が三か所すなわち「上三方」の御蔵と「下三方」の御蔵、それに「舟場」の御蔵があったことがわかる。書かれた日にちにその蔵に年貢を納めたこともわかる¹²⁾。一括して庄屋のもとに納めていない。収穫

時期にあわせて何回かに分けて年貢を納めている。また、弥三右衛門はいくらかを仁兵衛と四郎兵衛に小作させていることもわかる。弥三右衛門は「御物成八石七斗壹升五合」を割り当てられた。それに対して納めた総額は「納メ拾石式斗式升五合」である。「亥夫進物備シ本利二渡ス」分と「頼母子米 庄右衛門渡」分も含まれている。差し引きして「引メテ八石七斗壹升式合 御物成」で年貢を皆済しているということである。

ところで、収納状況を示す記録には同じ種類の帳面でも一つのものがあったことがわかる。それは「御歳貢米小前通帳」というもので、「控」の文字があるかないかで記載内容も違っている。「御歳貢米小前通帳」は前掲のような記載内容であるが、「御歳貢米小前通帳」は簡略された記載である。享保十八年の「御歳貢米小前通帳」は次のようになっている。

吉太夫

御物成三石六斗壹升五合

内納方

一 壹斗五升

寅御種賃

一 三石四斗

出来納

一 四斗

賄手形納

納メ三石九斗五升

引残テ三斗三升五合

差引米

村取り遣り渡ス

皆済

(中略)

伊兵衛

御物成五石七斗式升八合

内納方

一 式斗

寅御種賃

一 四石八斗九升

出来納

納メ五石九升

引メテ六斗三升八合

差引帳

村方入

皆済

納められた内容が簡単に記載されている。そして、差し引きされて、割り当てられた「御物成」の額より多く納めた者は「村取り遣り渡ス」となり、少なかつた者は「差引帳 村方入」となり、最後のところは「皆済」となる。吉太夫は「三斗三升五合過分に納めたので村の方へ渡した。伊兵衛は「六斗三升八合」足らなかつたので村より入れてもらった。このことは、多く収穫できた者は余計に納めて村の方へ渡し、不足した者は村の「差引帳」から入れてもらうかたちに

なっていたことがわかる。収穫に応じて納めることが出来る分だけ納めていたということである。それを「差引帳」に記録し差し引きしていたものと思われる。

ちなみに、享保十八年、十九年は「御歳貢米小前通帳」で、享保十七年、二十年は「御歳貢米小前控通帳」である。「御歳貢米小前控通帳」の方が年貢の収納状況が詳しく書かれている。詳しく書いて控えて置いて「御歳貢米小前通帳」としてまとめたのかもしれない。史料としては「御歳貢米小前控通帳」が参考になる。

三 村請制の特質と免割

(一) 享保十七年の米納負担状況

享保十七年の「免割帳」と「小前帳」をもとに米納の負担状況をみると表4のようになる。持高の多い百姓は小作に出して「下作料〇〇方入」と小作人から年貢が納められていることがわかる。ただ、庄屋八郎右衛門も持高の大部分を小作に出していると思われるが「小前帳」に具体的な記載がない。小作人が小作料として出した部分の記載はあるが入ってきた部分の記載がない。六石壹升五合がそれにあたると思われる。しかし、それにしても収支が合わない¹³⁾。持高の少ない人で「下作料〇〇方入」とあるのは家の労働力等の事情で小作に出しているものと考えられる。また、持高の少ない人で「下作〇〇三渡ス」とあるのは小作している分の年貢である。地主・小作関係の実態がこの帳面からも垣間見える。

更に、この時期否この時期に限ったことではないが、近世を通じて耕作地の移動が頻繁である。持高の変遷を見ればおのずから明らかになってくる。幕藩体制下では、寛永二十年(一六四三)二月の田畑永代売買禁止令、寛文十三年(一六七三)六月の分地制限令、或は元禄八年(一六九五)六月の質地取り扱いに関する二カ条の覚、享保三年(一七一八)八月の質地取扱覚、享保七年(一七三二)四月)の流れ地禁止令などで土地の所有の在り方が制限されている¹⁴⁾。また、質地請戻し慣行がある¹⁵⁾。にもかかわらず持高の変化は著しい。この時期の持高の変遷を杉之内村の一部であるがみると表5のようになる。多くの百姓の持高は変化している。こうした百姓の持高の変化を庄屋は把握しないことには公正な免割ができない。年貢の請求から収納までの間は短い。この間に一人一人の年貢の割り振りをする。煩雑な中で「甲乙のない」免割が求められているということである。こうした状況下で庄屋が毎年のように変わっていったらどうなるか。庄屋がなかなか交代できないという事情もわかる。庄屋が世襲であったり何年も続けたりしているのはそうした事情によるものと考えられる。庄屋が次々に変わるとこの煩雑な事務的な処理がまわらなくなる。庄屋交代の裏事情、これも村請制の特質の一つということができる。村方騒動が起これるのも村請制に起因することが考えられる。これは後年のことになるが、現在の監査請求に当る諸帳簿の開示を求める村方騒動などはまさに村請制と大きくかわっている。また、百姓一揆などにみられる階級的な対立についても村請制に規定されるところが大きいと考える。村請制と村方騒動、百姓一揆などとの関係については、近世の中・後期・幕末に関係し、幕藩体制の変質・崩壊の論理に結びつく内容でもあり興味あるところである。今後の課題としたい。

表 4 享保17年米納負担状況 杉之内村免割帳より

単位 石 銀方は匁

名前	持高	免割高	免割外の主なもの	実納高	御蔵納	種貸等 拝借米入	銀方へ 回された分	備荒
弥三右衛門	14.374	8.712		10.225	5.130	1.740		1.850 下作料仁兵衛方入 1.180 下作料四郎表方入
吉太夫	6.009	3.575	2.600 下作新兵衛ニ渡ス	6.740	6.310	0.390	5.05	
吉兵衛	3.159	1.967		2.704	2.230	3.740		
久右衛門	1.326	0.833		4.671	3.935	0.110		
仁右衛門	0.446	0.336	0.880 下作八郎右ニ渡ス 0.950 下作助太夫ニ渡ス	0.336	0.065	0.270		
平九郎	2.569	1.619		1.619	1.425	0.180		
六郎太夫	1.803	1.141		2.825	1.700	0.150	4.16	
三郎兵衛	5.578	3.313	1.580 下作八郎右ニ渡ス 0.050 下作忠右衛門ニ渡ス	8.689	4.655	0.772		
伊兵衛	9.938	6.176	1.450 下作伊兵衛ニ渡ス 3.350 下作七左衛門ニ渡ス	4.431	2.180	0.540		
貞養		1.739		2.031	0.180		0.39	1.450 下作料三郎兵衛方入
蓮花寺	2.739	1.645		5.280	0.100	0.090	13.32	0.880 下作料塩田与次右方入
十七郎	11.141	6.736		2.232	2.605	0.100		
伝兵衛		5.052	0.700 下作十七郎ニ渡ス	6.004	3.880	0.460	4.00	
吉左衛門	14.138	8.622		9.090	4.935	0.710	2.16	
吉郎兵衛	1.006	0.721	0.050 屋敷年貢十七郎ニ渡ス	2.310	0.000	0.100	4.72	
清兵衛	1.187	0.751		0.751	0.610	0.110		
長右衛門	3.820	2.193	1.180 下作八郎右ニ渡ス	3.600	1.235	0.190	11.94	
十太夫	1.467	0.956		1.050	0.530	0.120	7.24	
惣四郎	7.060	4.317		4.660	2.150	0.360	26.41	0.950 下作料忠左衛門方入
六郎兵衛後家	0.020	0.037			0.037			
仁左衛門	3.428	2.218	0.028 屋敷年貢吉左衛門ニ渡ス	2.515	1.500	0.330	20.71	
喜左衛門	6.962	4.386		4.610	3.750	0.460	17.25	
惣左衛門	1.120	0.725	1.150 下作長太夫ニ渡ス	2.040	0.530	0.110	12.71	
長太夫	9.354	5.827		6.150	3.180	0.530	24.87	1.150 下作料惣左衛門方入
清右衛門	9.698	5.773		6.335	4.825	2.090	43.27	1.900 下作料十右衛門方入
藤右衛門	12.995	7.893		8.413	2.360	0.660	12.40	0.730 下作料長太夫方入 0.650 下作料太郎兵衛方入
忠左衛門	11.699	6.972	1.080 頼母子米渡ス	8.202	6.085	0.630		0.400 下作料四郎兵衛方入
九左衛門	0.085	0.072		0.075	0.030	0.040		
仁兵衛	2.505	1.522	1.850 下作弥三右衛門ニ渡ス 0.120 下作岡村 忠右ニ渡ス	3.492	2.680	0.190		
源四郎	4.501	2.726		13.750	2.390	2.340		

名前	持高	免割高	免割外の主なもの	実納高	御蔵納	種貸等 拝借米入	銀方へ 回された分	備荒
治兵衛	2.917	1.833	0.1400 下作岡村 忠右ニ渡ス 0.370 下作八郎右ニ渡ス	2.490	1.050	0.190	0.54	
治右衛門	4.829	2.913	0.300 下作岡村武右衛門ニ渡ス	4.043	2.890	0.290		
伝五郎	1.779	1.069		1.070	0.940	0.130	0.08	
与三太夫	0.230	0.174		0.174		0.010		
四郎兵衛	0.184	0.134	1.180 下作弥三右衛門ニ渡ス 0.400 下作忠左衛門ニ渡ス	2.074	1.040	0.040		
吉右衛門	8.891	5.435		5.435	3.290	0.520		
与次右衛門	6.074	3.806	0.090 吉太夫ニ渡ス 0.400 次郎左衛門ニ渡ス	4.380	3.200	0.390	6.47	
長左衛門	8.059	4.893		6.985	4.920	0.450	19.40	
利左衛門	11.515	7.025	1.600 下作次郎左衛門ニ渡ス	8.905	4.720	0.570	21.56	
次郎左衛門	23.571	14.776	0.815 頼母子米渡ス	15.604	7.700	1.130		1.600 下作料利左衛門方入 0.690 下作料六太夫方入
太郎兵衛	3.543	2.222	0.650 下作藤右衛門ニ渡ス 0.135 下作忠左衛門ニ渡ス	6.126	3.205	0.270		
七左衛門	2.097	1.165		1.165	0.580	0.160		
六太夫	2.395	1.542	0.730 藤右衛門ニ渡ス 0.250 長左衛門ニ渡ス	4.837	2.225	0.180		
助太夫	18.731	11.299		13.795	5.240	0.920	15.09	2.050 下作料庄右衛門方入 0.950 下作料久右衛門方入
庄右衛門	8.495	4.969		9.440	2.180	0.460	78.62	
三右衛門	0.245	0.169	0.220 下作助太夫ニ渡ス	0.639	0.000	0.020		
十兵衛	24.172	14.238		15.953	8.930	1.120	70.46	0.850 下作料太郎右衛門方入 0.850 下作料六郎兵衛方入
平次郎	2.168	1.352	0.164 与三太夫ニ渡ス 0.180 十右衛門ニ渡ス	1.696	1.355	0.160		
太郎右衛門	1.497	0.790	0.850 下作十兵衛ニ渡ス 1.750 下作忠左衛門ニ渡ス	3.540	2.350	0.100		0.200 下作料与次太夫方入
六郎兵衛	3.334	1.830	1.800 下作八郎右ニ渡ス 0.850 下作十兵衛ニ渡ス	4.485	2.640	0.210	0.39	
九郎太夫	5.587	3.232	1.350 下作市郎左ニ渡ス 0.120 下作忠右衛門ニ渡ス	5.062	4.190	0.340		
忠右衛門	4.349	2.372		3.102	1.710	0.270		0.500 下作料六郎太夫方入 0.120 下作料九郎太夫方入
伊右衛門	0.044	0.051						
八郎右衛門	25.497	5.171		91.438				6石015

表5 享保期の持高の変遷 (一部)

年代 \ 人名	弥三右衛門	吉兵衛	久右衛門	三郎兵衛	長右衛門	忠左衛門	仁兵衛	源次郎	四郎兵衛	太郎兵衛
享保17	14.373	3.159	1.326	5.578	3.820	11.699	2.505	4.501	0.184	3.542
享保18	〃	〃	0.083	〃	3.224	13.428	〃	4.961	〃	〃
享保19	14.327	〃	〃	〃	2.824	11.144	〃	4.931	〃	〃
享保20	14.311	〃	〃	〃	〃	9.959	〃	4.878	〃	〃
元文元	14.300	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

年代 \ 人名	六太夫	三右衛門	九郎太夫	太郎右衛門	忠右衛門	十七郎	助太夫	庄右衛門	藤右衛門	仁右衛門
享保17	2.395	0.245	5.587	1.497	4.349	11.141	18.731	8.495	12.995	0.446
享保18	〃	〃	〃	〃	4.393	11.015	16.541	〃	14.920	〃
享保19	1.993	〃	〃	〃	〃	10.902	〃	8.740	13.379	〃
享保20	〃	〃	〃	〃	〃	〃	18.078	7.215	16.798	〃
元文元	1.893	〃	〃	〃	6.767	〃	17.153	8.940	16.641	〃

年代 \ 人名	吉太夫	平九郎	六郎太夫	伊兵衛	伝兵衛	吉左衛門	吉郎兵衛	清兵衛	十太夫	惣四郎
享保17	6.009	2.569	1.803	9.938	〃	14.138	1.006	1.187	1.467	7.060
享保18	6.020	〃	〃	9.128	11.015	〃	1.081	〃	〃	〃
享保19	6.500	〃	〃	5.862	〃	〃	1.194	〃	0.348	〃
享保20	6.020	〃	〃	〃	10.902	〃	〃	〃	〃	〃
元文元3	〃	〃	〃	〃	〃	14.130	1.847	〃	〃	〃

年代 \ 人名	太郎兵衛後家	仁左衛門	喜左衛門	惣左衛門	長太夫	清右衛門	九左衛門	源四郎	治兵衛	治右衛門
享保17	0.020	3.428	6.962	1.120	9.354	9.698	0.085	4.501	2.917	4.829
享保18	〃	〃	6.006	〃	8.943	〃	〃	4.955	〃	5.029
享保19	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4.931	〃	〃
享保20	〃	〃	〃	〃	〃	10.976	〃	4.878	〃	5.389
元文元	〃	〃	5.929	〃	〃	10.922	0.141	〃	2.867	4.180

(二) 飢饉対応と村請制について
ちようど、享保年間、飢饉が何回か襲ってきて村ではその対応に困っている。享保十七年も西日本を飢饉が襲った。この地域も被害を受けたようである。「享保十七年子十二月 前之庄組杉之内村飢人内改帳控」がある。それには次のように飢人が詳細に調査されている。領主側に調査結果を報告するためと飢人の救済に作成されたものと思われる。かなりの人数である。

高老石八斗三升
一人数三人
内 老 人 かせき仕申候
メテ式人 内 男老 女老 飢人
平九郎
杉之内村

高老石三斗式升六合
一人数五人
内 老 人 かせき仕申候
メテ四人 内 男老 女三人 飢人
久右衛門

高四斗四升六合
一人数零人
内 老 人 かせき仕申候
仁右衛門

(中略)
人数メ九拾人
内拾七人 かせき仕申候
残り七拾三人 内 男三拾四人 女三拾九人 飢人
子ノ十二月三日

丑之三月飢人内改帳控
高三石五斗式升九合
一人数四人
内 男 老 人 女 老 人 かせき仕申候
メテ 女老 人 飢人
杉之内村
仁左衛門

(中略)
人数拾七人
内 五人 かせき仕申候

メテ拾式人 内内 男五人 女七人 飢人
右ノ者共夫食無御座當時及飢ニ申候間、御慈悲之上如何様共御救被為遊被下置候ハバ、
難有可奉存候、以上、
享保十八年丑ノ二月三日
組頭 助太夫 印
庄屋 八郎右衛門 印
大庄屋所

丑二月小高持夫食御願控
高三石五斗五升九合

一人拾式人

内 三人 かせき仕申候

メテ九人 内 男三人 女六人

(中略)

村中惣人数 式百四拾式人

内

人数 八拾人

内 拾三人 かせき仕申候

残り六拾七人 内 男三拾五人 女三拾式人

右ノ者共夫食無御座難義仕候間、御慈悲之上如何様共御救被為遊被下置候ハバ、難

有可奉存候、

丑ノ二月三日

大庄屋所

(下略)

このように、享保十七年の冬に七十三人(丑の正月に一人病死して七十二人)、享保十八年の春に十二人、同じく春に小高持の者六十七人と持高に応じてお救いの対象者を調査している。飢餓の程度が重いところから救済しようとしている。そして、冬の願いの七十二人に対しては、御蔵米壹石式斗四合を受け取り、一人について壹升六合五勺ツツ割り渡している。春の分については加西郡の善右衛門から銀を借り米を買って割り渡している。

享保十七年は飢饉の影響がかなりあったと考えられる。飢饉で夫食まわっているにもかかわらず、「小前帳」でみたように、十月の十二日の段階で年貢を二三七石二斗納めている。後先を考えないでまず年貢を納めている。そして二月の段階で七〇人余の飢人を数えるにいたっている。次の年になっても多くの飢人をだし、救済にあたっている。

村請制をとっている責任から村では年貢を皆済するということが最優先にされている。ここで、村請制のまた一つの特質が見えてくる。村の責任で年貢を皆済することがなによりも優先されるということである。しかし、ここで注意しなければならないことは、飢饉などのときに年貢を皆済したからといって、村が崩壊するようなことになったり、或は村人が飢え等でない

くなってしまうということは村の存続にかかわる内容となつて大問題である。村請制を維持するためには村の存続、百姓の維持が不可欠となるということである¹⁶⁾。したがって、飢饉等の場合は村や百姓を守るといふ観点から救済措置が取られることとなる。村の中でのお互いの救済や、責任者である庄屋を中心とする本百姓の維持のための対策を講じなければならない。村請制の特徴として村の中での相互扶助が組織化されていくこと、本百姓の維持政策は当然の成り行きであるということになる。

(三) 村請制と村落自治

年貢を村で請け負い百姓間に不公平がないように、また不平が出ないように割り振りする。年貢に関しては自分たちで割り振りし納める。そういう意味で村は自治的な集団になっているといえる。しかも、前述したように村中の若で、小作まで集まって相談の上で割付するようになっている。村中の合議を言っている。また、五人組の前書きでも徹底している。村中の合議は、大体次のようにある¹⁷⁾。全国的に残るこの期の「五人組御仕置帳」に見られる内容である。

一 毎歲御年貢免定出候ハバ村中之もの為致披見、庄屋年寄方より村中大小之百姓出作之者江も不殘相触寄合候て免割いたし小物成口米浮役臨時物とも可納米銀壹人宛委細書付小百姓も疑敷不存様其詔為申聞右書付為寫其上免定別紙継候而立会披見仕候旨書付銘々印形可取置、郷落戸にも免定之写可張置、御年貢割仕候節村中夫錢小入用御年貢と入交一同不可致差別を立、可割之、算用違無之様随分可入念、御年貢之儀者不及申外物とも申渡候通相納候様常々村中可申合事

御触れに相当する「五人組御仕置帳」にあることが注目される。村請制を通して領主側が村の自治を認めているということである。領主側が年貢の割り振りに関して民主的な合議を説いているのは注目される¹⁸⁾。ただ、もし庄屋が中心となつて「庄屋請」の状態であるとするならば、「地方自治¹⁹⁾」というよりも「地方集権²⁰⁾」といえるのかもしれない。しかし、年貢に關しては「相談して」とか「甲乙なく」とか民主的で自治的な面がある。しかし、村の政治的な面とを合わせて考えると、やはり庄屋が中心となる。庄屋のところに権力が集中する形になっている。村方騒動が展開されたり、村役人の民主的な選定がなされたりする中で、本来の意味で本百姓らが村政の主体となり民主的で自治的な内容となっている。領主側が村請制を通して村の自治の道筋を開いているという点は見逃してはならないところである。そして、村の中では、村方騒動を見てもわかるように村民一人一人の発言力がだんだんと増していき、自治が成長し前進しているということである。村請制の村落自治に果たした役割を評価するとも二つの特質としてあげておかなければならない。今後、「地方集権」の中で、本百姓の意思の反映であったり、主体性の発揮がどのように成長前進してくるか、村落自治の発展の姿がどのようなものであったのかも少し細かく分析する必要があると考える。

おわりに

杉之内村の享保期の「免割帳」を中心にして村請制の実態を見てきた。村請制は石高制と切っても切れない関係にあるということで幕藩体制の根幹をなす制度であることは従来からいわれている。まさに、税の徴収という面で幕藩体制の経済面を支えている。税を村に課し、村に請け負わせるという特異な制度で、それがもたらす特質がみえてきた。すなわち、税を負担する本百姓を維持しなければならないということである。村請制をとるからには税の負担者を維持していかなければならないということである。本百姓体制の維持である。本百姓体制が崩れることは村請制の危機的状況を意味するということである。また本稿では、飢饉の際の相互扶助による本百姓体制の維持をはかるための政策の一端を見た。この相互扶助も村請制の特質の一つである。さらに、村請制の最終的な責任者は村役人ということになり、年貢未納者がでるとその分を補わなければならない。庄屋が補うことになる場合が多くなる。すると、庄屋と未納者との間に土地を媒介とした貸借関係が成立し、借りたものが返せない場合は質流れ現象で、必然的に土地が庄屋のもとに集積されていくという仕組みとなる。これは村請制の矛盾を示している。村請制によって一方で土地が庄屋等へ移動し集積が進む。その一方で土地を失った方は没落の危機にさらされる。地主と小作の間で問題が生じる危険性があるということである。そうして階級的な対立を起す。村方騒動に発展する要因ともなるということである。

さらに、村請制による村落の自治の問題である。村民が納得いくように配慮された「免割」をされ、村全員の合議、確認がされている。領主側が村落の自治を進めている内容である。領主が進めている自治が、村方騒動の内容からもわかるように成長し前進している。村請制が自治意識の高まりに果たした役割は大きいということである。

今後、村請制の質的な変化、その実態を、幕藩体制の変質・崩壊過程との関係について課題が残った。特に、後期から幕末維新の流れの中での村請制の特質について意識して取り組みたい。

註

1) 野尻泰弘『近世日本の支配構造と藩地域』(吉川弘文館 二〇一四) 四頁 研究史を簡潔にまとめている。歴史研究を年代を追って、五〇年代は民主化論・近代化論、六〇年代は幕藩制構造論、七〇年代は幕藩制国家論等々近世史研究の動向を的確にまとめている。そんな中で、深谷克己「幕藩制における村請制の特質と農民闘争」(『歴史学研究』一九七二一九七二年度大会報告別冊特集号)は、本格的研究の道筋を作った。村請制の特質について研究され、村請制の特質から農民内部に矛盾が生まれそれが農民闘争の性格をさめることなど意欲的にとりくまれた。最近では、小松賢司『近世後期社会の構造と村請制』(校倉書房 二〇一四)、松沢裕作『明治地方自治の体制の起源』(東京大学出版会 二〇〇九)などがある。

また、享保期の年貢増徴政策については、森安彦『幕藩制国家の基礎構造』(吉川弘文館 一九八二)一三三頁に詳しい。水本邦彦『近世の村社会と国家』(東京大学出版会 一九九〇)

二七五頁には、近世の土免制について詳しく参照した。

2) 清瀬一郎氏文書(以下「清瀬文書」とする)にある。本報告では四〇年以前に史料調査し、史料を写真にとっていたものを使用した。

3) 「永荒れ」や「川成」などの引高は差し引きされ、検見や定免によって年貢が決められていた。

4) 有本寛「村請制と自治村落の形成」(二〇〇五年 一橋大学経済研究所) 四頁。

5) 『姫路市史』第十巻 史料編 近世1(姫路市 一九八六) 一七五頁 青山村免状 菅原俊輔文書の元和武年二月廿八日にある。

6) 「免状」にある文面のパターンとしては、「右之通急度可皆済者也」(『龍野市史』第五巻「龍野市 一九八〇」一五三頁、堀謙二文書)のような簡単なものから、「右之通当已御取箇相究之間、村中大小百姓出作之者迄立会無相違割合之、来ル極月十日限急度可皆済者也」(『龍野市史』第五巻(前掲)一五六頁、堀謙二文書)というようなものもある。「村中大小百姓出作之者迄立会無相違割合」というようなのが一般的で、村の百姓が立ち会って免割をするように指示していた。村の方でも、その指示にしたがっていた。

7) 姫路大学所蔵文書。

8) 西川郁子所蔵文書。

9) 年貢の割り当てられたものと、収納状況を合わせた記録として、時代は古いが寛永八年拾一月吉日の「田住村免割帳」(播磨国佐用郡)には両方が記載されている。表紙表題の月日が、早い場合で十月末、遅くなると十二月の日付けであることから両方を兼ねた格好になったものと思われる。

10) 「明細帳」に記載されている額と差があるが、草藁銀の分の差である。草藁銀は村全体で負担していたために、ここでの計算から除外されていたものと考えられる。

11) 元文式年巳之三月の「前之庄組杉之内村辰之御年貢米并万維小前帳 ひかへ」の最後の部分には

三百式拾六石八斗壹升四合

三拾石

庄屋役高引

三斗五升

蓮花寺屋敷高引

残テ式百九拾六石四斗六升四合

右者杉之内村辰之御年貢米小役銀諸色万納方詮義之上割附少茂不殘勘定仕立相違無御座候、勿論、小百姓納分庄屋手前帳面二付置、銘々手形請取り出入無御座候、尤、此外一粒一錢茂出申候、若シ如斯算用之判形差上申所、重而出入之義申出シ候ハバ、如何様之曲事二茂可被仰付候、為後日仍而如件、

元文二年巳ノ三月

前之庄組杉之内村惣百姓 弥三右衛門印

(連印)

御奉行所

とある。「免割帳」と同じく惣百姓の連印で確認している。

- 12) 「御歳年貢米小前通控帳」の最後の部分には「寄」として各御蔵に納められたことがまとめられている。「上」は「上三方御蔵」を意味し、「下」「下三方御蔵」「舟」は「舟場御蔵」、他に「丸尾屋」もあった。

寄

メ拾五石貳斗	上	八月十四日
メ八石	上	同十五日
メ拾四石	舟	同十六日
メ九石六斗	舟	同十七日
メ八石	舟	同十九日・廿日
メ九石六斗	上	同廿三日
メ拾石四斗	下	九月十六日
メ拾三石六斗		丸尾屋渡シ 同廿二日
メ拾四石	同断	同断
メ六石四斗	同断	同断
メ貳拾石四斗	下	十月十一日
メ八斗	下	同日塩田村
メ七石貳斗	舟	同十二日
合百三拾七石貳斗		
メ八五	下	十月廿日
メ拾四石四斗		御用米御蔵納 十一月二日

(以下略)

というように納めている。十月十二日までに二七石余が納められている。

- 13) 八郎右衛門の家では「万貫帳」に記載していたものと思われる。家計についてはすべて「万貫帳」まとめている。小作料収入についてもある。

- 14) 土地の質入れから土地の移動、農民層の分解、封建的土地所有の変遷過程など土地制度については、大石愼三郎の研究がある。大石愼三郎『封建的土地所有の解体過程』（御茶の水書房 一九七〇）三四頁には田畑永代売買禁止令と土地集積の関係について具体的に述べてある。また大石愼三郎『近世村落の構造と家制度』（御茶の水書房 一九六八）二〇五頁、大石愼三郎『享保改革の経済政策』（御茶の水書房 一九六二）三四頁に詳しい。

- 15) 白川部達夫『日本近世の村と百姓の世界』（校倉書房 一九九四）四七頁、同じ白川部達夫『近世質地請戻し慣行の研究』（塙書房二〇二二）四二頁に、質地請戻し慣行について詳しくまとめられている。

- 16) 青山村「御仕置五人組帳」（前掲）にも「退転百姓之田畑山林等、親類たりとも持添ニ致問敷候、親類・名主・年寄・組頭立合相談之上、跡式相立候様可仕候、…」高拾石以下の百姓子供江田畑分譲候儀致問敷候、拾石以上たりとも田畑分候敷或者新規二百姓株取立候事有之候ハバ、書付を以願出吟味之上可申付候、惣而百姓跡式之儀、存生之内親類・名主・

年寄・五人組立合相極置…」ようにいつている。本百姓の維持について述べている。こうした文面はいろいろなところに出てくる。重要視していたことがわかる。

- 17) 『相生市史』第五卷（相生市 一九八九）三三五頁、この史料は元禄十四年の赤穂郡森組上土井村の「播磨国赤穂郡五人組御仕置帳」であるが、これと同じものがこの期の「五人組御仕置帳」にある。『地方凡例録』（近藤出版社 一九六九）にも「五人組帳前書之事」に同文がありひな形として用いられ全国的に広まっていたものと思われる。

- 18) 五人組自体もピラミッド型の階層的な組織ではあるが、「前書き」の内容などをみると至って村の自治的な組織と云うこともできる。

- 19) 村が自治集団となつてきている意味で、今日の地方自治とか地方分権とは意味が違つので「付きの「地方自治」とした。

- 20) 庄屋のところに権力が集中しているという意味で「地方集権」とした。